



澤春蔵には故郷が2つある。鳥取と大阪だ。この2つの故郷に軸足を置き、春蔵は「一人一業・自動車業は天職」の信念で「日交」を興し、西日本有数の企業に育てあげた。

免許証は県内で第3号

1901(明治34)年3月、鳥取県岩美町大谷に生まれた。小学校を卒業すると家事の手伝いなどをしながら終生の仕事を探した。就学前に足を痛めたため「体を考えると自動車の仕事が一番」と思いついたのも自然の成り行きかもしれない。さっそく運転免許を取得、トラック一台で運送業を始めた。夢の多い野心満々の18歳、社会人としての華々しいスタートといえたが、現実には、閉鎖的な風土や不便な道路事情などで、運送業としての見通しが立たなかった。なお、彼が取得した運転免許証のナンバーは県内で第3号。彼の先見性がうかがえる。

25歳で「沢タク」発車

1923(大正12)年9月、関東大震災発生。壊滅的被害を受けた東京の復興に参加して夢を切り開こう、と鳥取を後にした。しかし「東京は鳥取から遠すぎる」と大阪で下車。タクシードライバーとして働くことにした。

猛烈に働いた。人の2倍、3倍働いた。タクシードライバーと心中するほど働いた。困難にぶつかると母や故郷のことを思ったという。努力が実り1926(大正15)年、「沢タクシードライバー」を立ち上げることができた。25歳の春、ひとつの夢の実現である。

だからといって安閑としてはおれない。タクシードライバー界は「円タク」(※1)の洪水で激しい競争を繰り広げていた。「智力」「忍耐力」(※2)を集中し危機を乗り越えてきたが、台風には春蔵も逆らえない。1934(昭和9)年の室戸台風により、

大阪の経済復興を支える

日中戦争が深刻になるにつれ、政府の経済統制は厳しさを増す。大阪には、名義貸しや小規模タクシードライバーが多くなったことで政府は、100台以上規模の多元統制を命じた。そのなかで春蔵は、沢タクを中核にした5社を統合し1941(昭和16)年2月、「日本交通株式会社」を創立した。「日交」の誕生である。

1945(昭和20)年8月、ようやく平和の時代が到来したものの、日交本社は空爆による火災焼失に加え、同年9月の枕崎台風で冠水、使用できる車は数台という状況だった。

「車であれば何でも欲しい」。春蔵は、被災車や進駐軍の中古車払い下げなどを買い集めたが、調達に困難だったことから、自社整備工場で作ろうと決意。新車「日交号C型A・B・C型」、併せて123台を製造したのである。車不足の時代、大阪の経済復興を運輸面で支えた日交の功績はきわめて大きい。

鳥取歴史発見

澤春蔵

信念貫き、西日本有数の企業「日交」創業

文=須崎俊雄

郷土に尽くしたい

「大阪に住んで30年近く、ずいぶん浮き沈みもあったが、どうにか将来の見通しも立つようになった。これからは鳥取県のため、郷土に尽くしたい」

終戦の年の10月、「沢タクシー」として鳥取で開業した。1966(昭和41)年には「日本交通株式会社(鳥取)」と改め、日交グループ発展の基礎を築くことになる。そのハイライトは「夢の長距離バス」(※3)

実現だろう。

「鳥取県は阪神の経済圏に属しているからバスで両ブロックを結べば交流も激しくなり、鳥取県も今より多少潤うんじゃないか」

生まれ故郷の鳥取と第2の故郷・大阪を結ぶ山陰特急バスである。第一回の免許申請には、認可までに実に14年間を費やした。県民の喜び以上に、春蔵にとって大きな喜びであったはずだ。

ところで日交の営業は、2008年現在、大阪・京都・兵庫・鳥取・

鳥根・奈良・和歌山の2府5県に及ぶ。運転している自動車は2789両、従業員は4400名。春蔵のいう「体力」と「情熱的努力」の精神が生き続けている。

「和尚さん」と呼ばれ

第2次世界大戦の空爆で身元不明の死者は、大阪市西区の西六小学校校庭に埋葬されていた。小学校の跡地に本社を移した春蔵は、3月13日を忌日と定め手厚く慰霊したという。日交の澤廣行顧問(73)に伺っ

毎年、鳥取の若者を数多く日交に採用した。よく食事を一緒にし、話しこんだ。聞き上手だった。坊主頭で黒い詰襟、飾らない彼は、タクシードライバーの間で親しみと敬意を込めて「和尚さん」と呼ばれていた。

1972(昭和47)年7月24日、営業所を見回ったあと、社長室で急死した。71歳だった。故郷への熱い思いをバネに常にアクセルを踏みつけた人生、とっていいかもしれない。



澤春蔵



日交号C型の復元車

※1 円タク=昭和初期、大阪市内のタクシーは市内を1円均一で走っていた。実際には50銭、30銭といったダンピング競争が常態化していた。
※2 智力・忍耐力=春蔵は、苦難の過去を振り返り、「1.体力2.智力3.忍耐力4.情熱的努力」の4項目の信念を挙げている。
※3 夢の長距離バス=1966(昭和41)年7月14日、日ノ丸自動車、神姫自動車と共に運行開始。運行区間は米子・鳥取・大阪(319キロ)。当日、米子・倉吉・鳥取で盛大な開通式があり、沿線は祝賀ムードでにぎわった。当時、国内第3位の距離。
参考文献:『日本交通の歩みと時代背景』(上・中・下)平成7・10年発行・日本交通株式会社/『ふるさと人物誌』平成元年発行・岩美町教育委員会